

Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討

—Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて—

内 田 知 宏*

上 埜 高 志**

自尊感情を測定する際に最も多く用いられている尺度に Rosenberg 自尊感情尺度 (Rosenberg Self Esteem Scale; RSES) がある。本研究は、Mimura & Griffiths (2007) による日本語版 RSES (RSES-J) を用いて、尺度のさらなる精神測定特性について検証した。健常大学生 329 名に対して、RSES-J を施行した。また、簡易中核スキーマ尺度 (BCSS)、自動思考質問票 (ATQ-R)、そしてハッピーネス尺度を用いて RSES との関連を検討した。因子分析の結果からは、RSES-J が 1 因子構造であることが示された。 α 係数、再テスト信頼性によって RSES-J の信頼性が支持された。また、RSES-J と BCSS、ATQ-R、ハッピーネス尺度との関連から RSES-J の収束的妥当性が確認された。このように、Mimura & Griffiths (2007) による RSES-J は自尊感情を測定する尺度として信頼性、妥当性を備えており、日本でも幅広く用いられることが期待される。

キーワード：自尊感情、日本版 Rosenberg 自尊感情尺度、信頼性、妥当性

1. 問題と目的

今日、自尊感情または自尊心 (Self Esteem) という概念は世界的にも広く認識されており、心理学分野のみならず他のさまざまな領域でも実証的研究がなされている。自尊感情とは、自尊、自己受容などを含め、人が自分自身についてどのように感じているのか、その感じ方のことであり、自己の価値と能力に関する感覚および感情である。

自尊感情を測定する際に最も多く用いられている尺度に Rosenberg 自尊感情尺度 (Rosenberg Self Esteem Scale; RSES) がある (Rosenberg, 1965)。Rosenberg (1965) は、自尊感情は 2 つの異なった側面があることを指摘している。ひとつは個人が自分は「とてもよい (very good)」と感じる側面であり、もうひとつは、自分は「これでよい (good enough)」と感じる側面であるという。RSES で測っている自尊感情は、後者の「これでよい」と感じる程度である。つまり、自分を他者と比べて自信を感じるとか、優越感をもつといったものではなく、自分自身に対して尊敬でき、価値ある人間ととらえることができる程度である。

日本においても、RSES は自尊感情を研究する際にしばしば用いられているが、その方法は研究

*教育学研究科 博士課程後期

**教育学研究科 教授

者によって異なっている。まず、RSES について日本では多くの翻訳版が存在しており、また、その項目表現の違いによって結果に影響を与えているという問題がある。並川ら (2006) は、1965 年度から 2005 年度まで間に心理学関係の学会誌の 6 誌 (「心理学研究」、「教育心理学研究」、「実験社会心理学研究」、「社会心理学研究」、「発達心理学研究」、「パーソナリティ研究 (性格心理学研究) 」) に掲載された論文を調べたところ、RSES を用いた論文 98 件のうち、山本訳 (山本ら, 1982) が 40 件、星野訳 (星野, 1970) が 20 件と多く用いられていることを報告している。なお、その他にも多様な訳が用いられている。

さらに、質問項目の訳が同じであっても、選択肢の数が異なっている場合がある。もっとも件数の多かった山本訳を用いている研究でも、4 件法を用いているものから 7 件法を用いているものまでが存在するなど、質問文が同じでも回答カテゴリーが異なっており、測定結果に大きな影響を与えている (並川ら, 2006)。ちなみに、海外での使われ方の多くは 4 件法である。また、項目表現についても、もっともポジティブな表現だけでも「あてはまる」が 18 件、「非常に当てはまる」が 8 件、「かなり当てはまる」が 4 件、「非常によくあてはまる (3 件)」、「そう思う (3 件)」など多くの表現が用いられており、一致していないことも問題である。

因子構造、信頼性・妥当性についても、十分に検討されているとはいえない。RSES の因子構造については 1 因子構造との報告がほとんどであるが、2 因子構造が報告されている論文もあり、また特定の項目を削除して得点を算出しているものもあった。山本ら (1982) では 9 項目が 1 因子になるとし、9 項目の合計点を使っているが、どの項目が省かれたか記載されていない。さらに、山本 (2001) では原論文の著者であるにもかかわらず上述の 9 項目である点を無視し、10 項目の足し算をすること、構成概念妥当性 (因子的妥当性) があると述べていることなど一貫していない。また、星野 (1970) の日本語訳については、当初尺度としての検討はなされておらず、信頼性・妥当性についてのデータはない。

このような問題は、測定結果に大きな影響を与えたと考えられる。実証的研究を積み重ねていく上では、尺度の十分な検討をし、コンセンサスを得られた尺度を使う必要があるだろう。

近年、Mimura & Griffiths (2007) が新たな日本版 RSES を発表している。Mimura & Griffiths (2007) の日本版 RSES の特徴としては、まず、逆翻訳 (back translation) の過程を得ていることである。海外で開発された質問紙を日本で使用する場合、日本語に翻訳する過程が必要であり、原語に忠実な翻訳をするためには逆翻訳という手法がとられる。Mimura & Griffiths (2007) の報告では、逆翻訳をした後、日本語版と英語版の項目表現の等価性についても検討がなされている。また、第 2 の特徴としては Mimura & Griffiths (2007) の日本版 RSES は海外でも広く用いられている 4 件法を採用していることである。したがって、原版の RSES に忠実なバージョンであると考えられる。Mimura & Griffiths (2007) の報告では RSES-J は単因子構造を示すこと、内的整合性を有していることは確認されているものの、尺度の再検査信頼性や、妥当性については検討されていない。

今後、日本において、自尊感情について実証的な研究を積み重ね、国際的な比較などを行っていく際には、尺度の有用性が十分に確立し、なおかつ等価性の得られた尺度を用いるべきであると考

えられる。そこで、本研究では、Mimura & Griffiths (2007) で用いられた RSES 日本版について、尺度の再検査信頼性や、妥当性の検討を加えた、さらなる有用性を検証することを試みる。

2. 方法

2-1. 調査対象

大学生 329 名 (男性 : 女性 = 185:144、年齢 = 20.84 ± 1.56 歳) に質問紙調査を行った。研究の目的と内容等について説明し、同意を得られた者に回答してもらった。本研究では対象を健常者に限定するため、質問紙の一部で精神科の受診歴および脳神経疾患の既往歴を尋ね、いずれかに該当した者は除外した。

2-2. 調査内容

Rosenberg 自尊感情尺度 (Rosenberg Self-Esteem Scale: RSES) は自尊感情を測定する、10 項目からなる自己記入式尺度である (Rosenberg, 1965)。回答者は、「1 = 強くそう思わない」「2 = そう思わない」「3 = そう思う」「4 = 強くそう思う」の 4 段階で評価を行う。得点が高ければ高いほど、自尊心が高いことを示す。先述のように、本尺度にはいくつかの日本語訳 (山本ら、1982 など) が作成されているが、本研究では Mimura & Griffiths (2007) の日本語版 RSES を使用した。使用にあたって、原著者から許可を得た。

簡易中核スキーマ尺度 (Brief Core Schema Scale; BCSS) は、自己と他者に対する信念を評価するために作成された 24 項目から成る自己記入式尺度である。先行研究 (Fowler et al., 2006) によると、BCSS は Negative-self (自己ネガティブ)、Positive-self (自己ポジティブ)、Negative-other (他者ネガティブ)、Positive-other (他者ポジティブ) の 4 つの下位尺度から成り立っている。回答者はそれぞれの信念を抱いているかどうかを「はい」か「いいえ」で回答し、「はい」と答えた場合には、その程度を「1 = 少しそう思う」「2 = まあまあそう思う」「3 = とてもそう思う」「4 = 完全にそう思う」の 4 段階で評価する。本邦では山内ら (2009) が BCSS を翻訳し、信頼性、妥当性を確認している。今回は、自己に対する信念 12 項目のみを使用した。

自動思考質問票 (Automatic Thoughts Questionnaire-Revised : ATQ-R) は、抑うつ時の自動思考の頻度を測定する尺度である (Kendall et al., 1989)。40 項目からなる自己記入式尺度で、回答者は「1 = まったく思い浮かばない」「2 = まれに思い浮かぶ」「3 = ときどき思い浮かぶ」「4 = しばしば思い浮かぶ」「5 = いつも思い浮かぶ」の 5 段階評価を行う。ATQ-R は、肯定的自動思考と、否定的自動思考の 2 つの下位尺度からなる。日本語版は、坂本ら (2004) が翻訳し、信頼性・妥当性を確認している。

ハッピーネス尺度は、人間の全般的な肯定的感情や社会的判断を測定するための 14 項目からなる尺度である (植田ら、1992)。回答者は各項目に対し、「1 = そう思わない」「2 = あまりそう思わない」「3 = 少しそう思う」「4 = そう思う」の 4 段階で評価を行い、総得点を算出する。また、下位尺度として「生活充実感」、「将来に対する積極的展望」、「ストレス・バッファ」、「自己肯定感」の 4 因子が構成され

ている。信頼性、妥当性については、植田ら (1992) が再検査信頼性と因子的妥当性および収束的妥当性を報告している。

2-3. 統計解析

RSES-J の回答が得られた 329 名を対象に探索的因子分析を行い、尺度の因子構造を検討した。さらに得られたモデルの適合度を確認するため、確証的因子分析を実施した。モデルのデータへの適合度は、モデルのデータへの適合度は、適合度指標 (Goodness of Fit Index; GFI)、自由度修正済み適合度指標 (Adjusted Goodness of Fit Index; AGFI)、比較適合度指標 (Comparative Fit Index; CFI)、及び、残差平方平均平方根 (Root Mean Squares Error of Approximation; RMSEA) によって検討した。また、クローンバックの α 係数 (Cronbach's coefficient alpha) の算出による内的整合性の検討、再テスト法による級内相関係数 (Intraclass Correlation Coefficient: ICC) の検討によって信頼性の検証を行った。再テスト信頼性の検討に際しては、質問紙を実施した 329 名のうち 50 名 (男性 = 23 名、女性 = 27 名、平均年齢 = 21.10 ± 2.19 歳) に、2 週間の間隔をあげ、再テストを実施した。データの照合には、学籍番号を使用した。妥当性の検討は、RSES-J と BCSS、ATQ-R、そしてハッピーネス尺度との相関によって検討した。

3. 結果

3-1. 因子構造について

健常大学生 329 名を対象に、RSES-J の 10 項目について、主因子法による因子分析を行なった。固有値 ≥ 1.0 を基準として分析したところ、単因子構造が得られた。なお、第 1 因子の固有値 (3.69) と第 2 因子の固有値 (0.99) との間に大きな開きが見られたことから、単因子構造と考えるのが妥当であると判断できる。因子ごとの固有値、および項目ごとの共通性、因子負荷量について表 1、表 2 に示す。

表 1. Rosenberg 自尊感情尺度の探索的因子分析 (主因子法)
の結果 1 (因子ごとの固有値)

因子	固有値	分散の%	累積%
F1	3.69	36.88	36.88
F2	0.99	9.91	46.79
F3	0.90	9.04	55.83
F4	0.88	8.78	64.61
F5	0.77	7.69	72.30
F6	0.73	7.28	79.58
F7	0.62	6.23	85.81
F8	0.54	5.38	91.19
F9	0.46	4.56	95.76
F10	0.42	4.24	100.00

表2. Rosenberg 自尊感情尺度の探索的因子分析(主因子法)
の結果2(項目ごとの共通性および因子負荷量)

項目	共通性	負荷量
#1	0.39	0.63
#2	0.29	0.53
#3	0.38	0.62
#4	0.17	0.42
#5	0.34	0.59
#6	0.38	0.62
#7	0.25	0.50
#8	0.16	0.40
#9	0.30	0.54
#10	0.35	0.59

さらに、得られたモデルの適合度を検証するため単因子構造における確証的因子分析を実施した。その結果、GFI = 0.94、AGFI = 0.91、CFI = 0.91、RMSEA = 0.08であり、モデルは受容できると判断された(図1)。

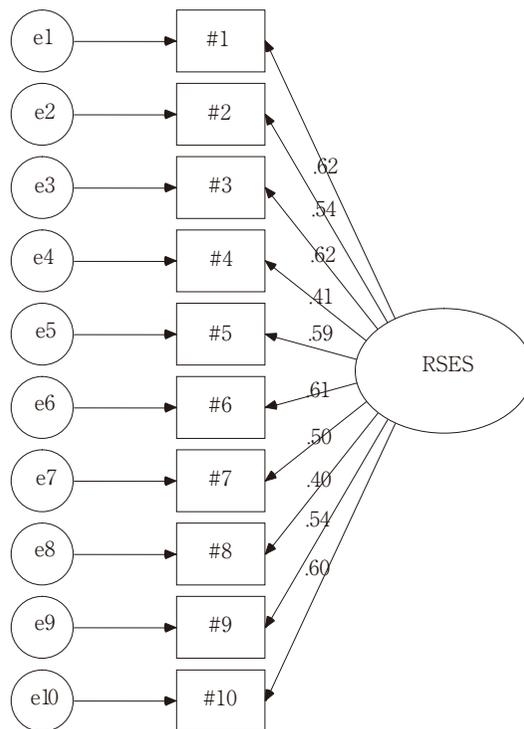


図1. Rosenberg 自尊感情尺度における確証的因子分析のパス図

3-2. 得点結果について

RSES-Jの平均得点は25.10 ± 4.57であった。各項目の得点結果については、表3に示す。RSES-Jと年齢との間には有意な相関が見られた($r = 0.11, p < .05$)。一方、男女差を検討するため独立し

た T 検定を実施した結果、性別による有意差はみられなかった。

表3. Rosenberg 自尊感情尺度の各項目および全体の得点

#	項目内容	平均値	標準偏差
1	私は、自分自身にだいたい満足している。	2.54	0.77
2	時々、自分はまったくダメだと思うことがある。	1.95	0.77
3	私にはけっこう長所があると感じている。	2.60	0.67
4	私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。	2.74	0.68
5	私には誇れるものが大してないと感じる。	2.53	0.74
6	時々、自分は役に立たないと強く感じることもある。	2.29	0.83
7	自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。	2.82	0.68
8	自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う。	2.12	0.79
9	よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。	2.68	0.84
10	私は、自分のことを前向きに考えている。	2.82	0.80

N = 329

3-2. 信頼性について

RSES の10項目に対し、内的整合性の信頼性係数である Cronbach の α 係数を算出したところ、 $\alpha = 0.81$ という結果が得られた。また、50名の健常大学生を対象として、再テスト法を実施した結果、1回目と2回目のテストの級内相関係数 (intraclass correlation coefficient: ICC) は、0.78であった (表4)。

表4. Rosenberg 自尊感情尺度の再テスト法における得点結果

平均 (\pm 標準偏差)		信頼性係数
1回目	2回目	ICC
25.98 (\pm 4.65)	25.48 (\pm 4.11)	0.78**

** $p < 0.01$ ICC; Intra Class Coefficients

3-3. RSES-Jの妥当性

妥当性の検証のため、RSES-J と BCSS、ATQ-R、ハッピネス尺度との相関係数を算出した。その結果、RSES-J と肯定的項目 (自己ポジティブ、肯定的自動思考、ハッピネス) との間には有意な相関が示された。一方、RSES-J と否定的項目 (自己ネガティブ、否定的自動思考) の項目の間には有意な相関が示された (表5)。

なお、年齢による RSES-J への影響も考えられたため、各分析に際して年齢を制御変数に加えた偏相関分析も実施した。その結果、顕著な違いはみられなかったため、通常の相関分析の結果を報告する。

表5. RSES-Jと、BCSS-J、ATQ-R、ハッピーネス尺度との相関(Pearson)

		N	平均	標準偏差	RSES-Jとの 相関係数
BCSS-J	自己ネガティブ	119	5.54	4.86	-0.52**
	自己ポジティブ	120	5.63	4.79	-0.59**
ATQ-R	否定的自動思考	120	65.21	23.32	-0.67**
	肯定的自動思考	120	23.83	8.20	-0.54**
ハッピーネス尺度	総得点	209	37.61	7.11	-0.45**
	生活充実感	208	13.96	3.59	-0.35**
	将来に対する積極的展望	208	8.77	2.26	-0.29**
	ストレス・バッファ	209	9.59	2.10	-0.24**
	自己肯定感	209	5.33	1.56	-0.49**

** p < .01 RSES-J; Rosenberg Self-Esteem Scale 日本版, BCSS-J; Brief Core Schema Scale 日本版, ATQ-R; Automatic Thoughts Questionnaire-Revised

4. 考 察

本研究は、Rosenberg (1965) が開発した Rosenberg 自尊感情尺度 (Rosenberg Self Esteem Scale; RSES) について、Mimura & Griffiths (2007) の日本語版 RSES (RSES-J) に着目した。Mimura & Griffiths (2007) の RSES-J は逆翻訳の過程を経ており、なおかつ原版と日本語版の表現の等価性についても検討がなされていた。さらに、海外でも広く採用されている4件法の手法を採用していたことから、これまでの翻訳に比べて原版に忠実な使われ方であると判断された。そこで筆者らは健常大学生329名を対象に RSES-J を実施し、尺度の因子構造の確認および信頼性・妥当性の検討を行った。

まず、RSES-J の10項目について探索的な因子分析を行った。固有値 ≥ 1.0 を基準としたところ、単因子構造が得られた。また、第1因子の固有値(3.69)と第2因子の固有値(0.99)との間に大きな開きがみられたことも単因子構造と考える根拠にもなった。さらに、単因子構造におけるモデルの適合度を検証するため確証的因子分析を実施した。その結果、モデルの当てはまりはよいものと判断された。Mimura & Griffiths (2007) でも単因子構造が報告されており、本結果はこれを支持するものとなった。Rosenberg (1965) の本来の構想においても、自尊感情尺度は1次元の構造となるべきであると考えられている。

本研究で得られた RSES-J の項目ごとの得点結果では、平均は1.95から2.82の範囲であった。また、標準偏差の範囲は0.67から0.84であり、適度にばらついており、どの項目においても天井効果およびフロア効果はみられなかった。また、RSES 全体の得点については 25.10 ± 4.57 と取り得る範囲のほぼ中央の値であった。菅 (1984) は、RSES を4件法の翻訳を用いた場合、青年における平均の高さは25点あたりであることを指摘している。さらに、ごく簡単な目安として20点以下を低い、30点以上を高いとみなすことを提案している。ちなみに、RSES を4件法の尺度として用いた国際比較研究でも、日本の健常者の平均はおおむね25点くらいであることが示されている (Schmitt & Allik, 2005)。したがって本研究で得られた結果は、標準的な健常者の自尊感情を示していると考えられる。

内的整合性の確認のために、RSES-Jの総得点におけるCronbachの α 係数を算出したところ $\alpha = 0.82$ であった。Cronbachの α 係数については、一般に0.70以上であれば許容しうる値であり、理想的には0.80以上とされている(Nunally et al., 1987)。したがって、本研究で得られたRSES-Jの α 係数は、十分な値であると判断できる。なお、Mimura & Griffiths (2007)においても $\alpha = 0.81$ という結果が得られており、本研究の結果はこれを支持するものとなった。また、RSES-Jを2週間の間隔をあけて2回実施する再テスト法を実施し、級内相関係数を算出した。BCSS-Jの再テスト信頼性係数は、 $ICC = 0.78$ であり、有意でかつ高い値が得られた。この結果は、RSES-Jの得点は安定した指標であることを示唆している。

RSES-JとBCSSの相関からは、自尊感情得点と自己に対するポジティブなスキーマは有意な正の相関を、一方自己に対するネガティブなスキーマは有意な負の相関を示した。Fowler et al. (2006)や山内ら (2009)の結果においても同様に、自己に対するポジティブ・ネガティブなスキーマが自尊感情の高低と強く関連していたことが示されている。BCSSが自己に対するポジティブ、ネガティブな評価といった特異的なスキーマを測定しているのに対し(Fowler et al., 2006)、RSES-Jは全般的な自己評価を測定している尺度として考えられている(Rosenberg, 1965)。これらの相関はともに自己に対する評価を測定しており、RSES-Jの妥当性を示す根拠となると判断される。RSES-JとATQ-Rとの関連では、自尊感情が高い者は、肯定的な自動思考も抱きやすいことが示された。一方、自尊感情が低い者は、否定的な自動思考を抱きやすいことが明らかになった。自動思考は、意図的な思考によるものではなく、自分の意志とは関係なく意識にあらがってくる考えである。これによって、自分に自信がもてなくなり、周りとの関係を否定的に考え、未来を悲観的に考えるようになり、これをBeck (1979)は認知の3大徴候(the cognitive triad)と呼んでいる。自己、他者、未来という領域を含む自動思考を測定するATQ-Rには実際、自己を評価する項目も多く含まれており、自尊感情と類似した概念を測定していると考えられる。また、RSES-Jはハッピネス尺度の総得点およびすべての下位尺度と有意な相関を示した。ハッピネス尺度を開発した植田ら (1992)は、ハッピネスを「自己の存在や成長、有能さなどについて主観的評価を含む、生活領域でのさまざまな事象についての満足感、肯定的認知や感情からなる主観的判断の総体である」と定義おり、このハッピネスの概念の中には自尊感情と共通した部分を含んでいると考えられる。とくに、下位尺度の一つである「自己肯定感」因子とは強い相関を示しており、RSES-Jの妥当性を示す大きな判断材料となる。以上のように、RSES-J、BCSS、ATQ-R、およびハッピネス尺度は、理論的に関連した構成概念を測っていると考えられるので、今回の結果はRSES-Jの収束的妥当性を支持するものと解釈することができる。

以上より、Mimura & Griffiths (2007)のRSES-Jは自尊感情を測定する尺度として信頼性および妥当性を備えていることが確認された。これまで日本においてRSESの日本語版はその使用の方法が研究者によって異なっていた。多くの翻訳が存在している、選択肢の数が異なっている、カテゴリーの表現が異なっている、因子構造が一致していない、信頼性・妥当性の検討が不十分であるといった問題は、これまでの研究の測定結果に大きな影響を与えているものと考えられた。実証的研

究を積み重ねていく上では、尺度の十分な検討をし、コンセンサスを得られた尺度を使う必要がある。本研究によって、Mimura & Griffiths (2007) の RSES 日本版のさらなる有用性を検証することができた。本研究が、今後、日本において、自尊感情について実証的な研究を積み重ねていくための一助となることが期待される。

【文 献】

- Beck AT, Rush AJ, Shaw BF, et al. 1979 Cognitive Therapy of Depression. New York, Guilford Press.
- Fowler D, Freeman D, Smith B, et al. 2006 The Brief Core Schema Scales (BCSS): psychometric properties and associations with paranoia and grandiosity in non-clinical and psychosis samples. *Psychol Med*, 36,749-759.
- 星野命. 1970 感情の心理と教育. *児童心理*, 24, 1445-1477.
- Kendall PC, Howard BL, Hays RC. 1989 Self-referent speech and psychopathology: The balance of positive and negative thinking. *Cognit Ther Res*, 13, 383-395.
- Mimura C & Griffiths P. 2007 A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *J Psychosomatic Res*, 62, 589-594.
- 並川努, 脇田貴文, 野口裕之. 2006 評定尺度法に関する諸問題の検討 I—Rosemberg 自尊心尺度を用いた予備的検討. *日本教育心理学会第48回総会発表論文集*, 96.
- Nunnally JC. 1978 *Psychometric Theory*, 2nd ed. New York, McGraw-Hill.
- Rosenberg M. 1965 *Society and adolescent self-image*. New Jersey: Princeton University Press.
- 坂本真士, 田中江里子, 丹野義彦, 他. 2004 Beck の抑うつモデルの検討—DAS と ATQ を用いて—. *日本大学心理学研究*, 25, 14-23.
- Schmitt DP & Allik J. 2005 Simultaneous administration of the Rosenberg Self-Esteem Scale across 53 nations: Exploring the universal and culture-specific features of global self-esteem. *J Pers Soc Psychol*, 89, 623-642.
- 菅佐和子. 1984 SE (Self-Esteem) について. *看護研究*, 17, 117-23.
- 植田智, 吉森護, 有倉巳幸. 1992 ハッピーネスに関する心理学的研究 (2): ハッピーネス尺度作成の試み. *広島大学教育学部紀要 第一部 心理学*, 41, 35-40.
- 山本真理子, 松井豊, 山成由紀子. 1982 認知された自己の諸側面. *教育心理学研究*, 30, 64-68.
- 山本真理子 (編). 2001. *心理測定尺度集 I—人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉*. サイエンス社.
- 山内貴史, 須藤杏寿, 丹野義彦. 2009 日本語版 Brief Core Schema Scales の信頼性・妥当性. *心理学研究*, 79, 498-505.

Reliability and Validity of the Rosenberg Self Esteem Scale

: Using the Japanese version of the RSES by Mimura & Griffiths (2007)

Tomohiro UCHIDA

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Takashi UENO

(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

The Rosenberg Self Esteem Scale (RSES) is the most recognized and widely used measure of the self esteem. In the present study, we used the Japanese version of the RSES (RSES-J) by Mimura & Griffiths (2007) and assessed the additional psychometric properties of the instrument. We applied the RSES-J to university students (n=329). The Brief Core Schema Scale (BCSS), the Automatic Thoughts Questionnaire-Revised (ATQ-R), and the Happiness Scale were used to investigate the relation with the RSES-J. Results of factor analysis revealed the one-dimensional factor structure of the RSES-J. The coefficient alpha and the test-retest reliability intra-class coefficients of the RSES-J supported the reliability of test scores. The convergent validity of the RSES-J was established by examining the relationship between the RSES-J and the BCSS, the ATQ-R, and the Happiness Scale. In summary, the RSES-J by Mimura & Griffiths (2007) is a reliable and valid instrument to measure self esteem and expected to be used widely in Japan.

Key Word : Self Esteem, The Japanese version of the Rosenberg Self Esteem Scale (RSES-J) ,
Reliability, Validity